# 「死者の復活」（コリント一、一五章一二～二〇節）

## 1　聖徒の日

今日は教会の行事暦で「聖徒の日」、永眠者記念礼拝です。午後、墓前礼拝も行われます。

昔から教会では一一月一日が「諸聖人の日」（オール・セインツ・デイ）と定められていて、諸行事が執り行われてきました。それに一番近い主日に私どもも、教会員で亡くなった方、そのご家族、また関係の方々などを覚えて、永眠者記念礼拝をささげております。

記念という言葉には、聖書ではとくに「思い起こす」という意味があります。今日は、まさに私ども何よりも思い起こしたいと思います。そして感謝し、悲しみの中にある方々に主の慰めを祈りたい。また、なお生きることを許されている私どもも、自らの行く末に思いをはせ、私ども自身の生と死のことを考え、信仰を新たにする機会ともなれば幸いです。

今年の聖徒の日の礼拝に当たり、私ども改めて考えていいことの一つは、キリスト教信仰の中心には復活信仰があるということです。そしてそれはキリスト教が希望の宗教だということでもあります。

キリスト教が希望の宗教だということは、何を意味するのでしょうか。すでに亡くなった方、召された人にとってそれは、何を意味するのでしょうか。そして、なおこの世の生活を許されている私どもにとってそれは、何を意味するのでしょうか。使徒の手紙から、二箇所を、参照します。テサロニケの信徒への手紙一と、ペトロの手紙一です。

兄弟たち、すでに眠りについた人たちについては、希望を持たないほかの人びとのように嘆き悲しまないために、ぜひ次のことを知っておいてほしい。イエスが死んで復活されたと、わたしたちは信じています。神は同じように、イエスを信じて眠りについた人たちをも、イエスと一緒に導き出してくださいます（テサロニケ一、四・一三～一四）。

神は豊かな憐れみにより、わたしたちを新たに生まれさせ、死者の中からのイエス・キリストの復活によって、生き生きした希望を与え、また、あなたがたのために天に蓄えられている、朽ちず、汚れず、しぼまない財産を受け継ぐ者としてくださいました（ペトロ一、一・三～四）。

はじめに読んだテサロニケの信徒への手紙（使徒パウロの手紙です）、その中でパウロは、すでに亡くなった、召された人について、「イエスと一緒に導き出してくださいます」と言っています。二つ目の手紙は（ペトロの手紙）なお地上の生活を許されている私どもについて、生き生きした希望を与えられていると語っています。そして二つの手紙とも、その希望の根拠を、死人の中からのイエス・キリストの復活に見

ています。

キリスト教は希望の宗教だと申しました。それは、私どもを、後ろではなく、前へと、全身をもって向かわせる宗教です（フィリピ三・一三）。その運動を引き起こすのが、イエスの死人の中からの甦りです。希望の宗教としてのキリスト教の一番根っこにあるのが、このイエスの復活です。復活があったから、私どもに希望が生まれたのです。

聖徒の日、永眠者記念のこの礼拝、亡くなった、召された方々を思い起こす礼拝です。しかし懐かしむためだけになされるのではありません。その人たちにとっても、私どもなお生きることを許されている者にとっても、神にあっての希望を新たにするためです。そのような希望に生きるようにしてくださった神に感謝し、賛美し、また共に祈りたいと思います。

## 2　復活の信仰

いま申し上げしたように、希望の宗教としてのキリスト教の根本、根っこ、それは死人の中からのイエスの復活にあります。

しかしまさにこのことが、つまり復活信仰が、今日の聖書箇所によれば、コリントの教会では揺らいでいたようなのです。

> キリストは死者の中から復活した、と宣べ伝えられているのに、あなたがたの中のある者が、死者の復活などない、と言っているのはどういうわけですか。死者の復活がなければ、キリストも復活しなかったはずです（一二～一三節）。

これは、コリントの教会に対するパウロの、ある意味ではとても厳しい問いかけであります。

このコリントの教会、使徒言行録が伝えているように（一八章）、パウロの伝道によってできたものです。それゆえ、と言ったらよいでしょうか、パウロも心から心配しています。

パウロが問題にしているのは、復活理解です。パウロによって使徒的な、正統な教えが宣べ伝えられ、教えられていたのに、また受け入れられていたはずなのに（一一節）、「死者の復活などない」と、その宣教の内容に異を唱える人が現れてきたのです。それをパウロは問うています。

この人たちの考えが、どういうものか、想像してみると、復活信仰を全面的に否定していたのではありません（もしそうなら、そもそも教会員ではない！）。イエスご自身の復活は認めていたけれど、そこから人間一般の復活ということになると、これは認められない、そういう考えの人たちであったように思われます。

例えば、当時、異教的な考え方として、少し難しい表現ですが、「霊肉二元論」というのがありました。人間で言えば心と体を分ける考え方です。そして霊的なものは永遠、しかし肉的な、外なるものは永遠ではない、あくまで地上的なもので、汚れている、霊的なものに比べて劣っていると見られていたのです。ですから、その肉、体

をもっての甦りというのは、イエスは別としても、人間においては考えられないことなのです。

使徒言行録を見ると、コリントの町に、パウロは、同じギリシャのアテネを経由してやって来たのです。アテネでは、パウロが「死者の復活」ということを語り出すと、ある人はあざ笑い、ある人は、いずれまた聞かせてもらおうと言って立ち去ったとあります。教会を形成しはじめたコリントの人たちも、人間の肉をとっての復活を認めないギリシャ的な考え方をなお色濃く持っていたのです。

彼らは復活を否定した、少なくとも人間一般の肉による復活は否定したと申しましたが、これには、別の方向に進んだものもありました。それは、いま言ったように霊的なものが永遠で、肉的なものは有限、霊的なものに劣ると考えた上で、われわれはキリスト教入信と同時に、すでに復活したのだ、いまこうして生きている、この現在の姿が復活した姿なのだ、という考え方です。これもしかし、正統な、パウロによって伝えられた信仰からすれば、正しくない。なぜなら、人間の復活は、歴史の終わりに起こるものだからです。キリスト者は現在すでに復活の生を生きているのだとすることは、万物が一新され新しい世界が来る、そのとき人は甦り、神の国がなるという信仰を否定することになります。

パウロが、コリント教会に求めた復活信仰、そのもっとも重要なものは、イエスの復活のゆえに、私ども人間も復活の希望を持っていいというものでした。「キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となられました」（二〇節）。眠りについた、すなわち、主にあって死んだすべての人が復活する。これが、パウロの宣べ伝えた復活信仰です。

## 3　復活と人生

キリスト教を希望の宗教にしている死人の中からのイエスの復活、この復活の信仰は、復活したイエスが使徒たちに出会ったところからはじまったのです。パウロは自分にも、いわば月足らず生まれたような自分にも、過分にも出会ってくださったと前の段落で書いています（一五・八）。

ですから、この復活の信仰は、頭で考え出されたもの、そうあってほしいという願望ではありません。私どもの復活の信仰は、事実に基づく使徒たちの証し、使徒たちの宣べ伝えによるものです。

このイエス・キリストの復活と私どもの宣教、キリストの復活と私どもの信仰、キリストの復活と私どもの人生、その深い関わりも、今日の箇所は明らかにしているので、そのことを取り上げたいと思います。

はじめに、イエス・キリストの復活と私どもの信仰の関係です。

キリストが復活しなかったのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお罪の中にあることになります。（一七節）。

パウロは、キリストの復活がなかったなら、私どものなお罪の中にあることになり、

罪の赦しの信仰は空しいと言っています。

イエスの十字架のことを考えていただければよいと思います。イエスの十字架のその死は、神の子イエスが、本来人が受けるべき罪の罰としての死を、代わって受けて人の罪があがなわれた出来事です。

もし復活がなかったとしたら、それは、イエスを十字架へと追いやった悪の力が勝利したということになるのではないでしょうか。悪の力が撃破された。それが、イエスが死人の中にとどまっていなかったことの理由です。人の罪はあがなわれた。復活はその、神の明らかな宣言であったのです。

次に、キリストの復活と宣教の関係です。

キリストが復活しなかったのなら、わたしたちの宣教は無駄であるし、あなたがたの信仰も無駄です（一四節）。

このことは、キリストと復活と罪の赦しについていま申し上げたことから明らかです。罪があがなわれた。罪とは、あれやこれやの悪さのことではなく、人間が悪の力に支配されていることです。その支配から、私ども解放された、救い出された、それがイエス・キリストの死人の中からの復活にほかなりません。

キリスト教宣教はその救いの事実に基づきます。その事実のない宣教は無駄、無意味です。偽証ですらあります（一五節）。

さて最後に、キリストの復活と人生の関係です。

この世の生活でキリストに望みをかけているだけだとすれば、わたしたちはすべての人の中で最も惨めな者です（一九節）。

今日は、キリスト教とは希望の宗教である、そしてその根拠は、イエスの復活にあるということを申し上げてきました。

別の言い方をすれば、イエスの復活が確かなものであるなら、死んで、召された者にとっても、なお地上を歩むことを許されている私どもにとっても、この世だけを視野に入れて歩む人生は、もはや十分な人生とはなりえない、ということです。何であれ、この世の生活の中にしか、望みをもたないとすれば、それはなかなかよい人生にはなりえないのです。

日本人の「現世主義」ということを言った評論家がいました（加藤周一）。あの世も現世に支配されているというのです。しかしキリスト教は、希望の宗教です。この世もあの世も貫く神のご支配を信じる宗教です。神はイエスの死人の中からの復活に力強く関与なさいました。今日の箇所で「キリストは死者の中から復活した」（一二節、他）とくり返し語られているところは、詳しく訳せば、復活させられた、甦らされた、です。言外に、「神によって」甦らされた、と言っています。この神の力がイエス・キリストにおいて働いたのです。この同じ神の力によって私どもも復活させられます。その希望にいまここで生きることが許されます。今日はその希望を共に新たにしたいのです。

（一一月七日）